

ひょうたん島通信

大槌発! 第14回

岩手県大槌町の大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センターのすぐ目の前に、蓬莱島という小さな島があります。井上ひさしの人形劇「ひょっこりひょうたん島」のモデルともされるこの島は、「ひょうたん島」の愛称で大槌町の人々に親しまれてきました。ひょうたん島から大槌町の復興、そして地域とともに復旧に向けて歩む沿岸センターの様子をお届けします。

コケムシを調べて大槌の海を知る

広瀬 雅人

大気海洋研究所附属国際沿岸海洋研究センター・東北マリンサイエンス拠点形成事業 特任助教

みなさまは、コケムシという生き物をご存じでしょうか。「コケ(苔)」でもなければ「ムシ(昆虫)」でもありません。たとえば魚市場や宴の席で、牡蠣の殻や昆布の表面に付着したザラザラした硬い苔のようなものを目にしたことがある人は多いかもしれません(写真A-D)。あれがコケムシです。苔のように見えるものはコケムシの群体で、実際には体長1mmもない個虫がたくさん集まっています。コケムシは、個虫の触手に生えた繊毛で水流を起こして水中の微生物を食べる歴とした動物なのです。苔のように見えることからこの名で呼ばれています。その群体の形態は多種多様で、中にはサンゴのように大きく成長し、サンゴ礁ならぬコケムシ礁を形成するものも知られています。しかし、そのような大規模なコケムシ群集は現生の海では世界的にもほとんど知られていませんでした。ところが、大槌湾にはその世界的にも珍しい大規模なコケムシ群集が存在する可能性があるのです。

私の大槌での研究は、巨大なコケムシ標本との出会いから始まりました。知人

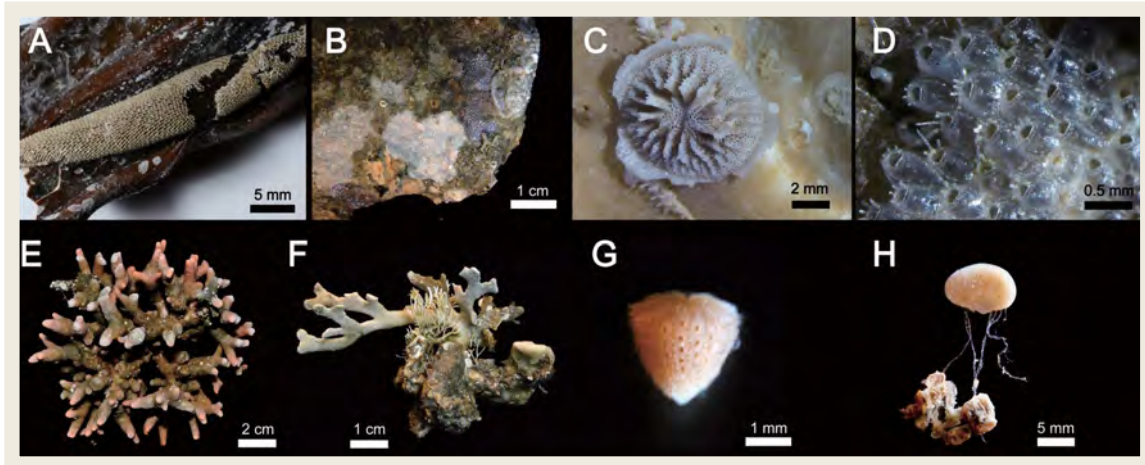
から偶然、大槌の刺し網漁であがってきた枝状のコケムシ(写真E, F)をいただいたのです。そのときから、大槌は私の憧れの地となりました。2009年4月に初めて大槌を訪れてから、私は2年間にわたって4月と7月に大槌でドレッジ(底曳き網)や潜水による調査を行い、多数のコケムシを採集しました。2010年には、当時は南方種と言われていたスナツブコケムシという数mmの小さなコケムシ(写真G, H)を大槌沖で発見しました。

4月末の調査の時期には毎年、近くの港でひょうたん島にちなんだ「ひょっこりひょうたん島まつり」が開催されており、昼休みには出店巡りや虎舞の鑑賞もしました。お祭りを締めくくる餅投げで、餅に紛れて飛んできた地元の「塩蔵わかめ」をもらったことも良い思い出となっています。

地元の方々からの標本提供にも助けられ、2年間の調査で大槌湾口部の岩礁域に大規模なコケムシ群集が形成されていることも明らかとなりました。そして3年目に入り、いよいよ湾口部で詳細な調査を行おうとしていた矢先、東日本大震

災が大槌を襲ったのです。震災の1年後に調査で大槌を訪問した際、変わり果てたその姿に胸を締め付けられる思いがしました。しかし、温かく前向きな大槌の人々に自分の方が逆に元気づけられたように感じました。

私は現在、毎月2週間ほど大槌に滞在しています。刺し網漁を再開した方から再びコケムシをいただくことができたので、震災前後のコケムシの成長速度の比較や、コケムシの骨格に残された震災の記録を探索する研究にも着手しています。コケムシを調べることで、海底における震災の影響を過去にさかのぼって知ることができるかもしれません。また、これと併せて大槌湾内各地で付着生物の調査も行っています。コケムシなどの付着生物はこれまで研究者もほとんど注目してこなかった動物たちですが、それらがつくる群集は他の生物に生息場を提供するとともに、重要な餌資源にもなっていると考えられています。今後、付着生物の湾内における分布や生態を詳細に明らかにすることで、良好な漁場の再生や資源管理にも貢献できればと考えています。



大槌とその近海で得られた様々なコケムシ A. 三陸産の昆布に付着したコケムシ、B. 岩に付着した被覆性のコケムシ群体、C. 牡蠣の殻に付着したハナザラコケムシの仲間、D. 牡蠣の殻に付着したウスコケムシの仲間の顕微鏡写真、E. コブコケムシの仲間、F. ツノコケムシの仲間、G. スナツブコケムシの仲間、H. スナツブコケムシの仲間

制作：大気海洋研究所広報室（内線：66430）